

Historical Development of Japanese Adjectives Expressing of Difficulty

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34399

形容詞系難易表現の史的変遷をめぐって

近藤 明

Historical Development of Japanese Adjectives Expressing of Difficulty

Akira KONDOH

一 はじめに

筆者はこれまで形容詞系の難易表現として、困難表現「ニクシ／ニクイ」(及びそれと関連する「ガタシ」「ツライ」)、容易表現「ヤスシ／ヤスイ」「ヨシ／ヨイ」を考察の対象としてきた。そこでいくつかのことを明らかにする中で、これらの共通点として浮かび上がった点、問題点・疑問点として浮かび上がった点もある。本稿ではそれらの点を整理するとともに、近年の「ツライ」の使用の実態についての調査結果を記して参考に供しようとするものである。

なお本稿で「形容詞系難易表現」と称するのは、「言ヒガタシ」「言ヒヤスシ」のように、形容詞が動詞に下接する用法で難易の意を表すものであり、複合動詞後項や補助形容詞とも言われるものである。

「コトカタシ」「コトヤスシ」「ノハムズカシイ」のような用法も、難易表現の一角を担うものと言えるが、この形で難易の意を表し得るのは、形容詞単独用法で難易の意味を有する「カタシ」「ヤスシ」「ムズカシイ」のようなもの(第二節での分類で

A・Bに相当するもの)に限られるようで、「ニクシ」等、形容詞単独の用法では難易の意味を持たないもの(同じくCに相当)ではこの形で難易の意を表すことができないようであり、対象となる形容詞に限られるところから、本稿ではひとまず考察の対象外とした。これらをどう位置付けるかも、今後の課題の一つとして挙げられよう。

二 意味変化の方向性

吉田金彦(一九七二)は「ヨイ」「ヤスイ」「ツライ」「ニクイ」といった形容詞系難易表現の意味変化の方向性として

「読みよい」の「よい」は、もと「良好」の意から「容易」「可能」などの意に転じたものである。また「書きやすい」の「やすい」はもと「平穩」の意から転じたものである。同様にして、「つらい」も「にくい」も辛酷・憎悪の意から、

難儀・困窮の意に変じたものと見られる。(p.51)

としている。感情・感覚、あるいは優劣・好悪の評価の意から、難易の意へ、という方向性と言えようが、⁽¹⁾、これらをもう少し

細かく分類すれば

A 「〜ガタシ／ガタイ」のように、形容詞単独用法「カタシ」の時点から、主に難易性の意味（この場合は「困難」）を表しており、動詞下接用法においてもそれが引き継がれたと思われるもの。

B 「〜ヤスシ／ヤスイ」のように、形容詞単独用法において、「平穩・安心」といった感情・感覚的な意味と、「平易」という難易性の意味の両方を有しており、動詞下接用法においては後者が引き継がれたと思われるもの。

C 「〜ニクシ／ニクイ」「〜ツライ」「〜ヨシ／ヨイ」のように、形容詞単独用法では感情・感覚的な意味や、優劣・好悪の評価の意を表しており、動詞下接用法において難易の意に転じたと思われるもの。

の三種に分けることができるかと思う。

このうちCに属するものは、動詞下接用法においては、難易の意に転じながらも、当初は感情・感覚的な意味や好悪の評価の意味が残っている面もあるが、文法化が進み意味の漂白化が進展するにつれて、純粹に難易（あるいは傾向）の意を表すようになっていく、という共通性があるようだが、語によつてはそのような変化があまり進展していないように見受けられるものもある。（後述の「〜ヨシ／ヨイ」等）

一方、Aに属する「〜ガタシ／ガタイ」では、既に単独用法において困難の意を有することもあつてか、動詞下接用法において特に注目されるような意味変化はないようであり、Bに属する「〜ヤスシ／ヤスイ」においても、中古〜中世前期頃にかけて、「〜ヤスシ」が「〜ヨシ」との住み分けの関係か、マイナス評価用法に偏つたように見える時期がある等のことはあつたものの（②）、Cに属するものと比べると変化は少ないと言えそうである。

Cのうち、困難表現に属する「〜ニクシ／ニクイ」「〜ツライ」は、形容詞単独用法では精神的・肉体的な苦痛・不快といった意味を表していたが、動詞下接用法においては当初は単独用法の意味の名残を残していたものの、文法化・意味の漂白化が進展し、純粹な困難の意に転じた（あるいは転じつつある）ものと言える。

例えば「〜ニクシ／ニクイ」であれば、当初は単独用法「ニクシ」の名残を残して、精神的理由・心理的抵抗による困難を表していた（林田昭子（一九九六））ものが、それ以外の能力・外的条件等による困難に拡大していくという変化が指摘されていたが、筆者が特に注目したのは、上接動詞が意志動詞か無意志動詞かという点、更にプラス・マイナスの価値観・評価であつた。「〜ニクシ／ニクイ」の場合、形容詞単独用法の意味・用法を残していれば、上接動詞は意志動詞的であり、価値観・評価はマイナス寄りであるはずであるが、意味の漂白化が進むにつれて、無意志動詞に接続する用法、マイナス評価を伴わない中立的あるいはプラス評価を伴う用法が現れることになるはずである。

実際に、抄物に既にそれかと見られる例があり（漢書列伝竺桃抄「菽ハカレニクイモノゾ」）、江戸期の農書にも数は多くないがそれかと見られる例（百姓伝記「地がねはへりやすく、ゆがねはへりにくし」）もあるのだが、実際にそのような「〜ニクイ」の用例が容易に見出されるようになるのは、昭和十年代と意外と遅く、江戸〜明治期の文学作品を中心に詳細な調査を行つている申鉉峻（二〇〇三）の「用例一覽」を見ても明らかにそれと見られる用例は見いだせない（③）。この期間、変化が停滞（あるいは逆行）していたかに見えるのはなぜであるのか、なお課題として残るが、文献、とりわけ文学作品中心の調査では十分にたどり得ない位相において、変化が進展していたと見るべきだろうか。

また「〜ツライ」は、上接動詞が限られ、マイナス評価を伴つ

てしか用いられない等の制約を有するものと見られていたが、第四節でも述べるように、近年において使用範囲を拡大しつつあると見られ、無意志動詞に接続する用法、マイナス評価を伴わない中立的あるいはプラス評価を伴う用法も認められるようになってきているようで、あたかも「ニクイ」のたどってきた変化を繰り返しているかの如き観がある。

これに対して、容易表現の「ヨシ/ヨイ」は、古く上代から見られるが、形容詞単独用法における優劣・好悪の評価の意味を残したまま、現代に至るまであまり際立った意味・用法の変化が認められない。近藤明(二〇一二)で述べたように、抄物においては無意志動詞が上接したかと思られる例(毛詩抄「死ヨイ」)や、プラス評価以外と思われる例(毛詩抄「賢者ハ進ミガタウテ退ヨイ」)が見られるものの、それ以降の時代の文献で見つけることは困難で¹⁾、現代共通語にも受け継がれているとは言えない。

これらの点を見渡すと、困難表現と容易表現との間の相違として、次のような点が浮かび上がってくる。

○Cに属するものうち、困難表現「ニクシ/ニクイ」は、非意志的動詞下接、非マイナス評価での使用というところまで文法化・意味の漂白化が進み、同じく「ツライ」も、同様のところまでの意味変化が進みつつあるように見える。一方、容易表現「ヨシ/ヨイ」は、一旦、非意志的動詞下接、非プラス評価での使用というところまで変化が進んだように見えるのに、その変化が進展・定着することではなく、あたかも逆戻りしてそれらの用法を失ったように見える。

○A・Bに属するものも含めると、困難表現は「ガタシ」から「ニクシ/ニクイ」に移行し、さらに「ツライ」への移行が進みつつあるようである等、比較的入れ替わりが目立つのに対し、容易表現は変化が少ない。「ヤスシ/ヤスイ」

と「ヨシ/ヨイ」の二本立てという点では、上代以来変化していないようにさえ見える。

三 容易表現と困難表現の相違

前節末で、意味変化における困難表現と容易表現の相違について触れたが、本節ではこの両者について、用例数の多寡と、用法の多様性という観点から、もう少し見ておきたい。

三・1 用例数の多寡

江戸・明治の困難表現・容易表現については、申鉉峻(二〇〇三)(二〇〇五)が、次のような数字を挙げて、補助形容詞による困難表現(申は「ネガティブな表現」とする)が容易表現(同じく「ポジティブな表現」とする)よりも優勢であるとしている。

「ガタイ」	一四〇	「ニクイ」	二〇六	「ツライ」	六
「ヤスイ」	九一	「ヨイ」	二一		

より古い時代については、村田菜穂子・前川武(二〇一一a)(二〇一一b)に用例数の挙げられている資料の数字を合計すると、次のようになる。

「ガタシ」	一五五六	「ニクシ」	二四五
「ヤスシ」	二四	「ヨシ」	四三

ちなみに「アリガタシ」(用例数四一六例)、「ミニクシ」(用例数二二例)は全て右の数字の中に入れてカウントしたが、前者のうち

「尊い」の意味のものや、後者の「醜」の意味のものは困難の意を離れているだろう。しかしそれを除いたとしても、なお用例数の差は、江戸・明治期にもまして大きい。

この現象の解釈は、古語において不可能（否定可能）表現が盛んに用いられるのに対し、肯定可能表現の使用は限定的であるといった、可能表現・不可能表現の非対称性と関係づける方向も考えられるだろう。筆者もその方向を否定するものではないが、それに加えて、次に述べるように困難表現「くガタシ」「くニクシ／ニクイ」「くツライ」の用法が多彩であることも、何がしか関与していると考えられはしないかと思う。

三・2 困難表現の用法の多様性

以下に示すのは、旧稿での調査の中で気付いたことに若干の整理を加えた程度のもので、網羅的な調査や系等的な分類に基づいたものではないが、困難表現の用法の多様性の一端は伺い得るかと思う。

【非難・制止】

①「あなききにくや。世に難つけられ給はぬ大臣を、口にまかせてなおとしめ給ひそ」

(源氏物語 真木柱 源氏物語大成 九五三⑤)
②「何條サル事ノ候べき。サマアシク、聞ニクク候。ヲリサセ給へく」

(沙石集 第六・一 旧日本古典文学大系 二六一①)
③継子を憎み実の子を持たずはやしたる最眞口、聞兼て隠居繁齋、数珠つまぐつて奥より出「アアおぼは聞きづらひ。…エエちと嗜めやれ。嫁女、気にかけてたもんな」

(浄瑠璃 桂川連理柵「一七七六年」 岩波文庫 八四④)

①の「あなききにくや」は、源氏を恨みのものしる大北の方(鬚黒北の方の母)を夫の式部卿官がたしなめる場面で、「聞いていて不快で、聞き続けるのが困難である」「聞くに堪えない」の意の「聞きにくし」を使うことで、発言を非難・制止しているものと言える(源氏物語では「あなききにく」若菜下 一一七四⑧も同様)。
②は「後家ノ禅尼」の仏事での老僧の発言を、「後見ノ入道」が「聞カネテ」中止するよう求めている発言での用例である(註)。③は継子の長右衛門を後妻のおとせが非難する発言をしているのを、温厚な隠居である繁齋がたしなめる場面である。

【断り】

④あて宮

「言の葉のはかなき露と思へども我がたまづさと人もこそ見れ

と思ふになむ、きこえにくき」と聞こえ給へり。

(宇津保物語 祭の使 『うつほ物語全』 二〇五⑥)
⑤「仰せはもつともなれども、わが身にとつては叶ひがたい
(canaiगतai)」

(エンポのハブラス 炭焼と洗濯人の事 四七三⑩)
⑥何程に被仰ても、ちと申受にくい訳が御座る。いつ迄も辞退
仕りまする」

(虎寛本狂言 素襖落 岩波文庫 中一七六⑧)
④はあて宮が懸想人の仲忠に対して、返事の便りを送ることを断る言葉、⑤は間借りをしたいという炭焼きの申し入れを洗濯人が断る発言、⑥は主人の伯父が饑別に素襖を与えようというのを、太郎冠者が辞退する場面での用例である(なお用例⑥は青木博士(二〇〇九)によって存在を知った)。高山善行(二〇一〇)は枕草子での「断りの述部」に不可能表現の使用が目立つとするが、困難表現にも類似の用法が認められる点、注目される。

【婉曲】

⑦「都ヲ出テ後ハ、イツトナク宗盛知盛、一船ヲ樓トシテ日重月ヲ送シカバ、人ノ口ノサガナサハ、何トヤラン聞ニクキ名ヲ立シカバ、畜生道ヲモ経ル様ニ侍リキ」

(延慶本平家物語 第六末二五)

『延慶本平家物語 本文篇』 下五二七⑧

建礼門院が、兄弟の宗盛・知盛との関係を取り沙汰されたことについて、自ら語る場面で、直接は言いにくいことを「聞ニクキ名」と婉曲に表現している。

【遠慮】

⑧「申にくきことなれども、せうせう(見目がよ)ひ分は、むすめががつてんまいるまひが、そなたはごらふぜられたか」

(虎明本狂言 みめよし)

『大藏虎明本狂言集の研究 本文篇』 下二二五⑬

⑨「サア、申しにくひ御無心ながら、私がおふいふ事に出まするわけ、お聞被成てふびんと思しめし、どふぞ一所にふせりまする事は」

(歌舞伎 東海道四谷怪談 序幕 岩波文庫 六〇③)

主張や要求を伝える発言の前置き部分で使われているもので、「言いにくいことだが」と遠慮の気持ちを表すことによる聞き手に対する配慮が感じられる。

【斟酌】

⑩「何か様子は存じませぬが、女儀の事なり、殊には往来、(借着的返済を)どうぞ待ちにくくもござらうが今日一日の所を待って上げて下され。私がお願ひ申します。

(歌舞伎 三人吉三郎初買 岩波文庫 一三三⑤)

おしづに着物を返せと迫る損料屋利助と研屋与九兵衛に対し、一日待ってやってくれと八百屋久兵衛がとりなす場面であるが、依

頼・要求の前置きで、相手にとって受け入れにくいことであろうかと、斟酌してみせることで、配慮の姿勢を表しているものかと思われる。

前述のように、右の分類は網羅的あるいは系統的なものではない、それぞれの用法の用例も、必ずしも最古の用例や代表的な用例というわけではないが、容易表現「〜ヤスシ/ヤスイ」「〜ヨシ/ヨイ」にこのような用法の広がりを見出し難いのに比べて、困難表現の用法が多彩であることは確かと思われる。とりわけ対人配慮に関連する用法が目立つようである。

このように困難表現が多様な用法の広がりを持つことが、困難表現の用例の多さとともに、新たな表現による更新の必要性にもつながり、容易表現に対して比較的入れ替わり・更新が活発に行われた(あるいは行われつつある)という面がありはしないかと考える次第である。

四 現代語「〜ニクイ」「〜ツライ」の調査結果

第二節において、「〜ツライ」が近年その使用範囲を拡大しつつあるようであると触れ、あたかも「〜ニクイ」のたどってきた変化を繰り返しているかの如き観があるとの見解を示したが、「〜ツライ」の増加については、例えば山田俊雄(一九九九)では、テレビ番組の発言での「読みづらい」について

「読みづらい」という言い方が私の耳に際立って聞える。私なら「読みにくい」というところである。(p150)

「×××づらい」が少数派であった時代が、ずっと続いてきた筈で、最近の一〇年ほどで「×××にくい」をおしのけるように変わったものようである。(p153)

といった見解が述べられており、神作晋一(二〇〇六)において

は、スポーツ紙のウェブサイトに於ける用例の調査・分析が行われている(6)。更に近年の中学校教科書においても

新しい物や考え方を示す外来語は、聞き慣れない人にとって
は意味を推測しづらいことが多い。(光村図書出版 二〇二二
年度版中学校教科書『国語3』「和語・漢語・外来語」 p.二九)
文を書くときに、文法に注意せずに書くと、一つの文が複数
の意味に読み取れてしまったり、分かりづらい文になってし
まったりすることがある。(東京書籍 二〇二二年度版中学校
教科書『新しい国語2』 p.二五六)

といった例が見られるようになっていく。

本節では、筆者が勤務先の大学の一般教養科目として担当して
いる科目の受講者(一年生が中心。学部は文系・理系にわたる。
また日本語ネイティブ・スピーカーでない者は除外)を対象に、
二〇〇四年と二〇一一年に実施した「〜ニクイ」「〜ツライ」の使
用実態に関するアンケート調査の結果を示し、現代における「〜
ニクイ」と「〜ツライ」の使用実態の一斑として、参考に供しよ
うとするものである。

調査は後に掲げる1〜12の例文について

○「〜ニクイ」のみ使う。

○どちらを使うが、「〜ニクイ」の方をよく使う。(「〜ニクイ」
▽「〜ツライ」)

○どちらも同じくらい使う。(「〜ニクイ」Ⅱ「〜ツライ」)

○どちらを使うが、「〜ツライ」の方をよく使う。(「〜ツライ」
▽「〜ニクイ」)

○「〜ツライ」のみ使う。

の五段階のいずれかを選択させる形で行った。例文は次のような
ものである。

1 言い() 話だが、君にはもう金を貸せないよ。

2 友達を非難するようなのは書き()。

3 あの先輩は気むずかしそうで、話しかけ()。

4 足に豆ができて歩き()。

5 古い粉薬は、水がないと飲み()。

6 この万年筆は古くなったので、とても書き()。

7 ノートパソコンのキーボードは、キーの配列が窮屈で使い
()。

8 今回のレポートは、難しいテーマなので書き()。

9 松井さんの会社内での位置は、社内の若い者にとってはおわ
り()。

10 薪がしめっついていて燃え()ので、御飯をたくのに苦勞
した。

11 冬型の気圧配置のとき、太平洋側では雪や雨が降り
()。

12 防火衣は、燃え()布でできていて、熱や炎から消防
士の身を守ってくれる。

例文1〜3は旧稿で「I心理的・精神的抵抗による困難」とし
たものの例で、1は『現代形容詞用法辞典』で「〜ツライ」の「心
理的にむずかしい場合」の例文として挙げられている。「いづら
い話だが、君にはもう金を貸せないよ」を利用していただいた
ものである。

例文4〜7は、同じく「II 肉体的苦痛・五感への負担による
困難」としたものの例で、4は『基礎日本語1』で『「〜づら
い」は『辛い』で肉体的理由に原因することが多い』として挙げられて

いる用例の一つ「足に豆ができて歩きづらい」による。5・6は「III 道具の使い勝手の悪さ」としたものの例で、6は『外国人のための基本語用例辞典』の用例「このまんねんひつは古くなったので、とても書きづらい」による。

例文8～10は「IV 技術・能力・外的条件による困難」の例で、うち10は動詞が無意志動詞であるものである。なお9は、椎名誠『新橋烏森口青春篇』の「その会社の若いものにとって、松井の会社内での位置、というのはどうも基本的にわかりづらいところがあった」(新潮文庫p八三)という用例に手を加えたものである。10は無生物主語であるが、そのために御飯を炊くのに苦労したというマイナス評価を伴うものである。

例文11は無生物主語でかつプラス・マイナスの評価を伴わない中立的なものであり、「()」「づらい」は「自然現象を表す動詞や非意図的な動詞には付きにくい。×雨が降りにくい」「『明鏡国語辞典』大修館書店」という記述を意識したものである。雨が降らないことで不利益・苦痛を感じているといったニュアンスが入らないよう、気象学的な事実を述べる形としたが、気象庁俱知安測候所のホームページに「冬型の気圧配置のとき、札幌や岩見沢では特定風向以外では雪が降りづらいが」(<http://www.sapporo-jma.go.jp/sp/kutyaru/web/name/name2.htm> 二〇〇四年九月閲覧)とあったのをふまえてそれに手を加えた。例文12は10と同じ動詞「燃える」が使われ、かつ10と違ってプラス評価を伴うもので、札幌市消防局のホームページに「防火衣 燃えづらい布でできています。熱や炎から身を守ってくれます。(<http://www.city.sapporo.jp/shobo/works/syouka-katudo/syouka-katudo.html> 閲覧年月は前同)とあったのに手を加えたものである。

ちなみに筆者自身の感覚では、例文8あたりから許容度が下がり、特に例文11・12は完全にアウトである(とはいえ、全く架

表 「～ニクイ」「～ツライ」使用状況の調査結果

nは各項目の有効回答数。「指数」は本文参照。他の数字は%。

	調査年	n	ニクイの み	ニクイ >ツライ	ニクイ =ツライ	ツライ >ニクイ	ツライの み	指数
例文1	2011	83	31.3	12.0	21.7	12.0	22.9	1.83
	2004	105	45.7	15.2	14.3	13.3	11.4	1.30
例文2	2011	83	14.5	12.0	14.5	12.0	46.9	2.65
	2004	105	15.2	13.3	13.3	13.3	44.8	2.59
例文3	2011	83	20.5	14.4	19.3	14.4	31.3	2.14
	2004	104	39.4	16.3	19.2	7.7	17.3	1.47
例文4	2011	83	21.7	15.7	19.3	14.5	28.9	2.13
	2004	104	16.3	11.5	22.1	18.3	31.7	2.38
例文5	2011	83	33.7	13.3	18.1	7.2	27.7	1.82
	2004	104	29.8	17.3	13.5	16.3	23.1	1.86
例文6	2011	83	30.1	20.5	20.5	9.6	19.3	1.67
	2004	104	28.8	23.1	16.3	12.5	19.2	1.70
例文7	2011	83	30.1	22.9	16.9	13.3	16.8	1.64
	2004	105	32.4	15.2	26.7	7.6	18.1	1.64
例文8	2011	82	32.9	15.9	12.2	11.0	28.0	1.85
	2004	104	30.8	21.2	13.5	12.5	22.1	1.74
例文9	2011	83	39.8	14.5	12.0	10.8	22.9	1.63
	2004	105	26.7	16.2	20.0	12.4	24.8	1.92
例文10	2011	83	72.3	10.8	6.0	4.8	6.0	0.61
	2004	103	75.7	14.6	2.9	1.0	5.8	0.47
例文11	2011	83	84.3	13.3	0.0	0.0	2.4	0.23
	2004	104	88.5	4.8	2.9	1.0	2.9	0.25
例文12	2011	83	86.7	7.2	2.4	1.2	2.4	0.20
	2004	103	93.2	4.9	1.0	0.0	1.0	0.11

空・仮定の例文にはならないよう、右のように公的機関のホームページで見られた用例に手を加える形をとった。

二〇〇四年の調査は、近藤明(二〇〇五)において提起した問題意識を受け、近藤明(二〇〇六)(二〇〇七)の参考にするために行ったものであり、例文もそれとの対応を意識したものである。二〇〇一年の調査は二〇〇四年との比較を重視して、それと同じ質問項目で行ったものである。そのため、例えば神作晋一(二〇〇六)で論じられている下接語による差の有無、といった問題には対応できていない⁹⁾。今後、現代語の「ツライ」の動態を更に追って行くのであれば、例文等を練り直す必要がある。

ちなみにアンケートの回収数は、二〇〇四年は一〇五枚、二〇〇一年は八三枚であるが、質問によつては回答がされていないか、たり、どれを選択したのが判定不能なものがあったりするため、項目によつて有効回答数が若干異なる。そのため各項目の有効回答数を、表に「n」として示した。

また簡易的な指標として、それぞれの回答に

- 「ニクイのみ」 0
 「ツライ」 1
 「ツライ」 2
 「ツライ」 3
 「ツライ」のみ 4

というポイントを与え、各例文ごとに回答者一人あたりの平均値を出した。表では「指数」の欄に記してあるものである。

この数字が2.0を超えれば「ツライ」優勢、2.0に及ばなければ「ニクイ」優勢ということになるが、二〇〇四年・二〇〇一年とも2.0を超えるのは「心理的・精神的抵抗による困難」にあたる例文2と「肉体的苦痛・五感への負担による困難」の例文4の

みである。特に例文2は他の心理的・精神的抵抗を表す例文1・3と比べても「ツライ」優勢が目立つ。回答者が例文の「友達を非難する」ということに強く心理的・精神的抵抗を感じたという面もあるうか。また自由記述に「にくい」は気持的に嫌な時、「づらい」は体的に嫌な時に使うように思う(二〇〇四年)とするものがあり、例文4で「ツライ」が優勢であるのは、そのような意識の反映という面があるかとも思われる。

この数字に二〇〇四年と二〇〇一年で0.1以上の差がある場合、多い方の年度の「指数」欄を網かけにしたが、二〇〇四年に比べて二〇〇一年に「ツライ」の増加が目立つのは、例文1・3あたりで、「心理的・精神的抵抗による困難」の場合、このように「ツライ」優勢への変化が目立ったり、例文2のように両年とも「ツライ」優勢であったりするようである。これ以外では「ツライ」使用の進展が明確でなく、横這い気味であったり、例文9などかえって二〇〇四年のほうが「ニクイ」優勢である。

一方、右の数字が1.0以下であるのは、上接動詞が無意志動詞で無生物主語である例文10、無生物主語に加え評価が中立的である例文11、同じくプラス評価を伴う例文12である。ただしこの中では例文10の許容度が比較的高い。徐修程(一九八三)は、非情物の性質を述べる場合であっても、もどかしさ・じれったさを感じている人間の存在が想起される場合は「ツライ」が使える旨を述べており¹⁰⁾、それを裏付ける結果とも言える。例文11・12のようにそれが想起されない場合は最も許容度が低い。それでも二〇〇四年、二〇〇二年とも全くゼロではなく、「ツライ」のみ使用すると回答した者も少数ながら存在することは(質問の趣旨を誤解して回答しているのでなければ)注目される。「ニクシ」/「ニクイ」では、これに相当する用法が広く見られるようになるまで相当の時間を要した観があるが、「ツライ」ではどうか。世代

差・地域差等も含めてなお今後の動向を追いみたいところである。

最後にアンケートの自由記述をいくつか挙げておく(必要に応じて要約や語句を補う等してあり、原文通りとは限らない)。

・「燃える」のような動詞は「づらい」はあまり使わないと思う。(二〇〇四年)

・例文11で「づらい」はまず使わない。(二〇〇四年)

・例文8までは「づらい」と聞いても何とも思わないが、例文9以降は「づらい」と聞くと違和感がある。私は、ほとんど「づらい」は使っていないと思う。(二〇一一年)

・例文10、11、12に「づらい」を使われると違和感があるが、ほかのものは話し相手が自分と異なる方を使用していても違和感はない。(二〇一一年)

・どれも「にくい」でも「づらい」でも、言われればあまり違和感はないし、意味も分かる。(二〇一一年)

・「づらい」は心理的な面が大きく、「にくい」は物理的・動作的な面が大きいと思われる。(二〇一一年)

注

(1) 感情・感覚的な意味から難易の意味へという点では、動詞下接用法を持たないが「ムシカシ／ムツカシイ」にも同様のことが言える。

(2) 近藤明・天谷友美(二〇一〇)。ただし高野山西南院蔵本仮名書き往生要集(一一八年前書)には

もろもろの行のなかに念仏の行はすしやすくしてこれさいせうの行なりといへり

〔高野山西南院蔵本 往生要集総索引 四一丁〕

という明らかにプラス評価と見られる例が見られ、この時期の「ヤスシ」も、必ずしも全てがマイナス評価だったのではないこと

が知られる例として、追加しておく。

(3) 近藤明(二〇〇五)(二〇〇六)(二〇〇七)等筆者の旧稿では、申鉞峻(二〇〇三)(二〇〇五)に当然言及すべきところではないなかつた。不明をお詫びする。なお、旧稿以後筆者が気付いた明治時代の文学作品の用例として

はからざる病のために、周囲の人の丁重な保護を受けて、健康な時に比べると、一歩浮世の風の当り悪い安全な地に移って来た様に感じた。

(夏目漱石「思ひ出す事など」十六

新書版漱石全集第十七巻 p四三下段)

といったものが追加できる(この例はプラス評価が少なくとも中立的。この後「生存競争の辛い空気が、直に通はない山の中」ともあり、プラスと見るのが妥当か)が、大勢は変わらない。

(4) 「ヨシ／ヨイ」についても、江戸・明治期についてはやはり申鉞峻(二〇〇三)(二〇〇五)に言及すべきであった。ただし申鉞峻(二〇〇三)の「用例一覧」によっても、この記述に反すると思われる例は見られない。

(5) どういう点を「聞カネ」たのかについては、近藤・大谷・斉藤(一九八九)に一つの考えを示した。なおこの説話は「説教師施主分聞悪事」と題されており、旧日本古典文学大系は、「聞悪」の部分を「ききあしき」と読んでいるが、あるいは「ききにくき」か。

(6) 文化庁「ことばに関する問答集 第16集」(一九九〇年)には、「『分かりにくい』か『分かりづらい』か」という「問」があり、「答」は「文学作品の用例を見ると、『分かる』に関して見た限りでは、すべて『わかりにくい』であった」としている。高島俊男『にくい』から『づらい』へ(『文芸春秋』二〇〇七年一月号)では、「敬語の指針―かえって分かりづらい―という朝日新聞社説の見出しについて、「すこし前までならこれは、『かえって分りにくい』であったと思う。小生のような古い人間には、このほうがずっとしっくりする」と述べられている。

(7) 光村図書出版の二〇〇六年度版の教科書では、これに該当する教

材は、『国語1』での「和語・漢語・外来語」と思われるが、こちらでは『ホームページ』や『アクセス』などの言葉は(中略)利用しない人にとつてはわかりにくい言葉であろう。(p.98)、「外来語には(中略)日本語をより豊かにするという優れた一面もあるが、いっぽうで、むやみに多用すると内容が伝わりにくいことがある(同)等、「ツライ」ではなく、「ニクイ」が使われている。アンケートの自由記述には「連体形のように用いるときは『にくい』『これ言いつらい』のように言いきる時は『づらい』を用いるのでは」(二〇一一年)と、この点に着目したのもあった。

(9) 三木望(二〇〇四)は、「ツライ」を接続し得る非対格自動詞は、「背後に動作主ないし原因の存在を感じさせる」ものであるとしているが、特に「背後に動作主」の存在を感じさせるといふのは、「もどかしさ・じれったさを感じている人間の存在」という指摘にも通じるように思われる。

参考文献

青木博史(二〇〇九)「近代語における『断り』表現」(野田尚史編『科学研究費補助金研究成果報告書 日本語の対人配慮の多様性』)
 漆谷広樹(一九九九)『くしくし』と『がたし』の語誌」(『国語語彙史の研究 十八』和泉書院)
 神作晋一(二〇〇六)「形容詞型接尾語『〜にくい』『〜づらい』の動向」(『国語研究』六九)
 近藤 明・大谷伊都子・斉藤由美子(一九八九)「沙石集の国語学的諸問題(一)」(『梅花短大国語国文』二)
 近藤 明(二〇〇四)『くしくし/ニクイ』の語史への一視点
 『現代語』『ツライ』との対照から」(『金沢大学教育学部紀要』五三)
 近藤 明(二〇〇五)『くしくし』の意味・用法の時代的变化—院政・鎌倉期まで—」(『金沢大学語学・文学研究』三三三)
 近藤 明(二〇〇六)『くしくし/ニクイ』の意味・用法の時代的变化—室町期以降を中心に—」(『国語語彙史の研究 二五』和泉書院)

近藤明・天谷友美(二〇一〇)『くしくし/ヤスシ/ヤスイ』の語史への視点」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』二)

近藤 明(二〇一〇)「容易の意の『ヨシ/ヨイ』の語誌」(『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』四)

洪谷勝己(一九九三)「日本語可能表現の諸相と発展」(『大阪大学文学部紀要』三三・一)

徐修程(一九八三)「『にくい』と『づらい』の異同について」(『日本語研究論纂』一)

申鉉竣(二〇〇三)「近代日本語における可能表現の動向に関する研究」(『純文社』)

申鉉竣(二〇〇五)「近代日本語の補助形式による可能表現について」(『近代語研究 四』ひつじ書房)

高山善行(二〇一〇)「中古語の『断り表現』について—『枕草子』の場合—」(『語文』九二・九三)

館谷笑子(二〇〇〇)「複合形容詞『〜ガタシ』『〜ニクシ』」(『国語語彙史の研究 十九』和泉書院)

林田昭子(一九九六)『にくし』『かたし』に関する一考察」(『山口国文』一九)

松浦照子(一九八五)「複合形容詞の形成と継承—平安時代散文作品における—」(『国語語彙史の研究 六』和泉書院)

三木望(二〇〇四)『くしくし』について—自発と否定、可能の連続性—」(影山・岸本編『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』くろしお出版)

村田菜穂子・前川武(二〇〇一a)「改訂・増補 古代語形容詞逆引き対照語彙表—上代—中世編—」(前編) (『国際研究論叢』二四・三)

村田菜穂子・前川武(二〇〇一b)「改訂・増補 古代語形容詞逆引き対照語彙表—上代—中世編—」(後編) (『国際研究論叢』二五・一)

山田俊雄(一九九九)『ことば散策』(岩波新書)

吉井健(二〇〇二)「平安時代における可能・不可能の不均衡の問題をめぐって」(『文林』三六)

吉田金彦(一九七一)『現代語助動詞の史的変遷』(明治書院)

吉田永弘(二〇一二)「る・らる」における肯定可能の展開」『日本語学会二〇一二年度春季大会予稿集』

付記

本稿は平成二二年度～二四年度科学研究費補助金「日本語可能表現・難易表現とその周辺に関する史的研究」(基盤研究C 課題番号22520460)の研究成果の一部である。

初校時付記

近藤明(二〇〇六)(二〇一二)では、現代語の「しよい」に関して、国国会議録検索システムによって見出した「牛乳なんというものの製品は大変腐りよい足の早いものでございまして」という用例を掲げ、発言者の堀本宣実議員が愛媛県越智郡玉川村(現今治市)出身であるところから、地域的特色のある用法かとの見解を示したが、この点について佐藤栄作氏(愛媛大学)から次のような情報をいただいた。土井中照氏(今治市中心部の生まれ育ち)によると、今治地方では「牛乳は腐りよい」「椅子が壊れよい」「ご飯がすえよいけん、夏は気つけいよ」等と、よく使われることである。